



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 「読む」力を育てる

巻頭エッセイ

字幕落語流コミュニケーション 桂小春團治 01

特集

「英語で読む力」とその育て方 池野 修 02

読解指導にパズルを解く楽しさを 田中武夫 06

読み深めから表現活動へ 高木 淳 08

コミュニケーションなリーディングのテスト 大森 博 10

連載

英語教師のための基礎講座 「木」も「森」も見る教師 高橋貞雄 12

評価クリニック リーディング・テストの常識・非常識 根岸雅史 14

授業レポート

本文の読解から自己表現へ (3) - 教科書本文を利用した自己表現活動の工夫 - 立川研一 16

小学校英語 Just Now 職員全員でとり組んだ授業実践と教材開発

- 校内研究会 ゼロからのスタート、そして今 - 前田善仁 / 香川麻理 19

単語の文化的意味 75 read 森住 衛 21

Essay The Perfect Omiyage (Part 1) Don Maybin 22

英語教師のリソース

アウトプット活動にも使えるウェブサイトを積極的に利用しよう

- こうすればあなたの授業はもっと生徒を魅きつける - 石川保茂 23

AROUND THE WORLD フランス：ことばと文化 [4] 町田 健 表紙裏

表紙写真について ハリー・ポッターの世界へようこそ！ 竹内 理 表紙裏

Vol.18

SUMMER 2010
SANSEIDO

フランス人の特性

フランス人は、ケルト人の基盤の上にローマ人が覆い被さったものに、ゲルマン人が影響を与えることで形成された民族です。言語はイタリア人やスペイン人と同じラテン系なのですが、この両民族が陽気な性格で知られているのに対し、フランス人はそれほど陽気には見えません。

フランスの列車の車両は、在来線だと「コンパートメント」と呼ばれる、三人掛けの席が向かい合って、一つの部屋のようにになっている区切りで構成されています。ですから、同じコンパートメントに乗り合わせると、たとえ向かい側の席でも、かなり密着した感じがします。この相手がフランス人だと、何時間一緒にいても、こちらに話しかけてくることはまずありません。こちらの方から適当な話題を持ち出して会話をしようとしても、無視されるわけではないのですが、簡単な返事してくれるだけで、会話がそこから発展することはあまりありません。イタリア人やスペイン人だと、もちろん相手にもよりますが、会話はそれなりに続きます。アメリカ人の旅行者ならば、大抵の人間が英語を話せるものと思込んでいますから、こちらが関心を示さなくても、向こうの方から積極的に話しかけてくることは珍しくありません。

フランス人は、見知らぬ人間と積極的にコミュニケーションをとることに、それほど関心をもたない民族だと言えるでしょう。ですから初対面の時には、ずいぶんと冷淡な感じがします。ただ、何らかのきっかけで親し

くなると、本当に心から大切にしてくれます。日本にいると、友人からの頼まれごとなど、面倒でやりたくないなあと思ってしまうこともよくあるのですが、フランス人の友人は、友人であれば当然のことだと、こちらの依頼はいやな顔一つせずにやってくれます。さらには、こちらが必要としていることをよく察してくれて、わざわざ頼まなくても助力を申し出てくれることもよくあります。世界に先駆けて市民社会を進展させ、個人の権利を優先しながらも、社会の利益を尊重するという考え方が、このようなフランス人の他人に対する接し方にも反映されているのだらうと思います。

フランスが、学問や芸術の分野で、世界に冠たる国だということはよく知られています。哲学や文学のような、あまり実用には役に立たないと思われている領域についても、フランス人は未だに高い関心を抱いています。日本語の文学作品や思想書のような外国の書物でも、代表的なものであれば大抵はフランス語に翻訳されていて、文庫に似た廉価な書籍の形で触れることができます。最近では、日本の漫画やアニメが、特に若者たちの間で非常に高い人気を博していることは、フランスも例外ではありません。こういう理由で、フランス人は日本に対して好意的な感情をもっているのが普通で、今後も両国は、特に文化の面で密接な交流を継続するでしょうし、それが世界にとって望ましいことは確かです。

表紙写真 について

ハリー・ポッターの世界へようこそ！

竹内 理 Takeuchi Osamu (関西大学)

左上の写真は、英国のオックスフォード大学 (the University of Oxford) を構成するカレッジの1つ、トリニティ・カレッジ (Trinity College) の前庭と建物を写したものです。11世紀に創設された英語圏では最古の大学の1つオックスフォード大学には、38のカレッジ(と6つのホール)とよばれる学寮があり、学科 (Department) と協力して教育に当たっています。カレッジは、それぞれ固有の財産を持った独立した私立大学のようなもので、オックスフォードの学生はす

べてどこかのカレッジに属して勉学に励んでいます。トリニティは学生数の面では比較的小さな規模のカレッジ(約400名)ですが、1554年に創立された伝統ある学寮で、夏には芝生の緑がまぶしい広々とした敷地を持ちます。右下の写真は、その食堂 (Dining Hall) です。ゲストや住込みの教員・学生はここで食事を取りますが、まさにそこはハリー・ポッターの映画に現れるhogwartsの世界です。重厚な作り、高い天井、見下ろす肖像画、どれをとっても見る人を圧倒します。



筆者は、教育学科 (Department of Educational Studies) が主催した外国語学習ストラテジーの国際会議がここトリニティ・カレッジで開かれたために、数日間ゲストとして滞在しました。左上の写真は、良き思い出として、今でも筆者のコンピュータのデスクトップを飾る1枚となっています。ちなみに、ハリー・ポッターの映画は、オックスフォード大学のボドリアン図書館 (Bodleian Libraries) や学寮の1つのクライストチャーチ (Christ Church) でも撮影が行われたようです。



字幕落語流コミュニケーション

桂小春團治 Katsura Koharudanji

国内をはじめ、海外でも落語をする機会がありますが、当然のことながら海外では、ことばの壁をどう越えたらよいかという問題にあたります。いろいろな考え方があると思いますが、私は、公演する国のことばを話すのではなく、字幕を使うことにしています。一つには、本場の落語そのものを伝えたいという思いがあるからです。上方落語を大阪弁のリズムや抑揚なども含めて肌で感じてもらいたい。落語そのものを、雰囲気も含めて一つの文化として伝えたい。我々も、洋画を見るときに、ことばはわからなくても、字幕があれば笑ったり泣いたりできる。映画のできるのであれば、落語でもできるのではないか。字幕を読むという形で向こうからも歩み寄ってもらおう。そう考えたのです。

ことばのほかにも問題はあります。日本なら、落語を生で見たことがない方でも、着物を着て座って話すなど、落語に対する漠然としたイメージがありますが、海外の方は、往々にして落語を見たことも聞いたこともありません。また、日本の古典芸能といえば、様式美としての美しさを持つ能や歌舞伎という形で知られ、日本人といえば、グレーや紺のスーツを着て、仕事をきっちりし、冗談ひとつ言わないイメージを持たれています。「落語」は、(真面目な)日本人による comedy であり、(様式美であるはずの)日本の古典芸能であるらしい。そのようなもので本当に楽しめるのかと、見に来る方は半信半疑です。芝居のように見えるけれども舞台装置は一切使わず、一人で何人もの人物を演じ分け、扇子や手ぬぐいをいろいろなものに見立ててイメージを広げていく落語のような comedy は、全く想像もつかないのです。想像もつかない芸能に興味を持って足を運んでくれただけでもありがたいといえます。

そこで、落語の本題に入る前には、落語の基本的な約束事、例えば、右を向いて次に左を向くと違う人物に変わっています、扇子が筆になったり、手ぬぐいを丸めるとお芋になったりしますといったことを、笑いを交えながら伝えるようにしています。また、上方落語には三味線と太鼓などの鳴り物が入るので、本格的なものを見せるために、必ず連れて行って生で聞いてもらいます。その際、親近感を持ってもらうために、古典的な出囃子のほかにも「ご当地ソング」を出囃子にアレンジして演奏します。イギリスでは、The Beatles の “Yellow Submarine” などを演奏するのですが、曲紹介のときに字幕を映すスクリーン上で、曲名を “Yerrow Submarine” とわざと間違え、日本人にとって難しい l と r の区別を逆手にとって笑いを誘う工夫などもします。実は、こういった解説をしているとき、私はまだ舞台上に上がっていません。このような導入をするのは、いきなり私が出ていって落語を始め、字幕を目で追ってもらうのではなく、笑いを入れながら、自然に字幕とフレンドリーな関係をつくってもらうねらいもあるからです。

海外公演をするにあたって、お客さんとの隙間をうめるために、いろいろな工夫をして「字幕落語」をエンターテインメントの一つとして作りあげてきました。今後もこのような形で多くの人に落語を伝えられたらと思っています。

かつら こはるだんじ

昭和33年生。落語家。平成11年に三代目桂小春團治を襲名。NPO法人「国際落語振興会」理事長。平成18年、文化庁文化交流使。海外では独自の字幕形式を使い、平成12年のエジンバラ・フェスティバルをはじめ、ニューヨーク国連本部やカーネギーホール公演など、これまででのべ10数カ国で公演。出囃子は、小春團治囃子・栗餅。

「英語で読む力」とその育て方

池野 修

(愛媛大学)

1. 英語教科書の「本文」の役割

中学校英語教科書は、各レッスンの「本文」を中心に編集されており、「本文」は様々な役割を担うことが期待されている。主には次の3つである。

- (1) 新しい言語材料の導入および既習の言語材料の強化：本文とは新出文法・語彙を導入するための手段(carrier)であり、また音読、筆写、シャドーイングといった英語を「取り込む」活動の対象となる素材である。言語形式の導入・強化をねらいとしているという意味で、“language text”(text for grammar and vocabulary acquisition)とも呼べる。
- (2) 読解力の養成：英文を読んで理解する力を養成するための手段。その本文の理解自体が目的ではなく、その学習を通して、「初見の英文」を読んで理解する力をつけるためのトレーニング素材である。読解力をつけることが主目的であるため、“reading text”(text for reading skills training)と呼べるかもしれない。
- (3) 思考力・感性の涵養(大きくは人間的な成長の促進)：知的・精神的成長にとって意味のあるメッセージ内容を読み、それについて考えることを通して「心」を育てる。多少不自然な英語表現かもしれないが、“text for mind and heart enrichment”と言える。

以下の論考では、(1)の文法・語彙の導入・強化という本文の役割の議論は他に譲り、(2)のリーディング能力のトレーニングという役割を中心に、リーディング能力の中身、それを育成するために「本文」に求められる特徴、リーディング指導のあり方について考えてみることにしよう。なお、対象とな

る学習者としては、主に中学校2年生後半～3年生を想定している。

2. 「リーディング能力」とは

「読む力」とは何か — 読みには様々なタイプがあり、包括的な概念規定を行うのは難しいが、「物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること」(新学習指導要領)などが、読解(reading comprehension)の中核部分を押さえた一般的な定義であろう。

構成要素に分けて考えてみると、リーディングは、文字を認識し、(音声再符号化を経て)単語を認定するといったミクロなレベルから、文と文の間にある論理関係を読み取ったり、書き手の意向を理解したりというマクロのレベルまで様々なプロセスから成っている。教育実践上は、次のような力(サブ・スキル)が特に重要であると考えられる。

(a)素早く正確に文字・単語を認識できる力

最も基本的な技能であるが、例えば、THIS IS DIFFICULT という表記のメッセージが通常の間である This is difficult より読みにくいように、自動化された(=意識することなく、高速で行われる)文字認識は極めて重要である。この力を養成するためには、基本的に、頻出語彙に繰り返し触れることが必要であり、多読(量をこなす)なども効果的であろう。すでに内容の分かった英文(e.g. 1学年前の教科書)を何度も繰り返し読むこと等も有効と考えられる。

(b)豊富な受容語彙(receptive vocabulary)

「単語の意味さえ分かれば英文は読める」というのは短絡的な誤解であるが、読解において、語彙力(目で見て意味の分かる単語=視覚受容語彙)は、おそ

らく最も重要な(比重の大きい)要素である。語彙知識の「量」(=いくつの単語を知っているか)はもちろんだが、その「質」(e.g. 頭の中にある辞書からどれだけ効率的に意味を引き出せるか、文脈に合う語義を選べるか)も問題になる。

(c) 英語の語順で意味を取る力

英語の発想の流れに沿って、提示される順序で文法構文・表現を処理する力を示す。返り読みをできるだけせずに、スラッシュ(/)等で英文をセンス・グループに切りながら読み下すような指導も有効である。また「英語の語順での理解」という観点から文法説明や訳語を再構築することも考えてみたい(例えば、“such as …”の訳語は「…のような」ではなく「例えば…」にする etc.)。

(d) 指示語の読み取りの力

it等の代名詞は言うに及ばず、(中学校ではあまり出てこないかもしれないが)the other(→「残りの1つ」って何?), this idea(→「どんな考え?」), the country(→「どの国?」)など、様々な表現が対象となる。あまり注意せずに読み飛ばしてしまう可能性もあり、文章の正確な理解、文間の意味の統合(以下(e)も参照)が妨げられてしまう場合もある。

(e) 単文の意味を統合して文章全体の意味を取る力

よく用いられる比喩を使えば、「一本一本の木を見るだけではなく、森の全体像を捉える」力と言える。一文ごとには理解できているつもりでも、「どんな内容のことが書かれていた?」とたずねられると回答に困ることがあるのは、文と文の間の意味が効果的に統合されていないことが主な原因である。ある程度の長さの英文を読む場合には、文章全体との関係を意識しながら各部分を読んでいく、区切り・まとめりごとに読み取った内容を頭の中で簡単に言ってみる(silent summarizing)なども有効であろう。

近年では、リーディングを「読解」(=書かれている情報の読み取り)に限定せず、より超領域的で総合的な行為とみなす立場もある。言及されることの多い「PISA型読解力」は、リーディング能力について、“Reading literacy is understanding, using, and reflecting on written texts, in order to achieve one’s goals, to develop

one’s knowledge and potential, and to participate in society.”(自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力)と説明している。つまり、リーディング(能力)には文章に書かれた「情報の取り出し」だけではなく、その「評価」や「活用」が含まれる訳である。また、PISA型読解力では、文章だけではなく、図表などの非連続型テキストも読みの対象となることも確認しておきたい。

新学習指導要領にも、PISA型読解力の「活用」「評価」に対応するような記述が含まれている。

(i) 伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。

→現実世界での読み(real-world reading)を意識し、書かれている(読み取った)内容に回答する。意味ある流れの中で、「読む」を他の技能(主に「書く」と統合する。

(ii) 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。

→ただ漠然と読むのではなく、「感想を述べるために読む」など、読後の行為を念頭において読む。また、読み取った内容について、「自分はどうか考えるのか」を述べる・書く(評価読みを行う)。

このような「リーディング能力」の構成要素を意識しつつ、多角的にリーディング指導を行っていくようにしたい。

3. リーディング能力を高める指導

リーディング能力を養うための指導の原則について、以下で考察してみよう(なお、中学校という英語学習段階では実現が困難なもの、時間的制約などから実施が無理な内容もあるかもしれない)。

(1) 読みの絶対量を増加させる。言うまでもないが、リーディングに限らず言語習得には膨大な量の目標言語との接触が必要とされる。絶対量を増加させるためには、生徒が読みたくなるような題材を多く準備し多読を促す、既習の教科書英文を何度も読ませる等の工夫が必要である(後者の場合、それが

「再読に値する内容の英文かどうか」という視点も重要になる。

(2) まとまった分量の英文を読むことに慣れさせる。全体的に、中学校教科書に掲載されている英文(1授業時間にこなす、教科書1ページあたりの英文)はreading textとしては短いように感じられる(これは、「本文」が読解トレーニングだけではなく、新出文法の導入という、もう1つの大きな目的を担っているためでもあろう)。中学校での到達目標として、例えば「基礎的な英語で書かれた、少なくとも250語、できれば300語程度の英文を読んで、その概要やあらすじを理解することができること」などを設定する場合、少なくとも中学3年次では、もう少し長い英文(レッスン本文を含む)でトレーニングを行うべきと考えられる。

(3) 読みの目的を明確にする。できるだけ「真真正な(authentic)」ねらいを設定する。読むことそれ自体が目的である場合もあるが、可能な限り、「なぜその英文を読むのか」、その必要性や意義を生徒が実感できるようにしたい。ターゲットとなる英文を読む前に、読みの状況設定、目的設定をどう行うかがキーになるはずである。

(4) 実践的な読み物を含む様々なタイプのテキストを読む。実践的な読みとは、現実世界で実際に行う読みの活動(real-world reading activities)、例えば新聞や手紙を読むという行為を示すが、現在までは、教科書本文の読みがこれらの読みとどう関係するのかという視点が希薄であったのかもしれない。実践的な読みの素材のみを扱うことは、言語習得の促進や知性・感性の涵養の観点からは問題があるとも考えられるが(後述の議論を参照)、「学習者が現実世界で目にする可能性の高い英文→それを模した教材の開発」という発想はもう少し取り入れても良いであろう。

(5) 読解発問に関して、概要を問う質問については、その設問への答えが英文の要約にもなりうるように、内容や配列を工夫する。また、「このメッセージを読む場合に、きちんと押さえておかなければならない情報は何か、どのような情報をチェックするのが本来的か」という観点から、関連の質問を優先的に作るようにする。なお、英語授業における発問

については、包括的な解説と豊富な具体例が『英語教師のための発問テクニック－英語授業を活性化させるリーディング指導』(田中武夫・田中知聡、大修館書店)にまとめられているので一読されたい。

(6) 様々なリーディング活動の中から、ねらいに応じて適切な活動を選択する。例えば、活動のレパートリーの中には次のような活動も含まれる。

・ **Picture Drawing** : 事物や状況が描写されている箇所を対象に、英文から読み取った文字情報を視覚的情報へ転換する。

・ **Table / Figure Completion** : (i) 読み取った内容を基に表を完成させる(例えば、「比較・対照」の構造が見られる文章内容に対しては有効と考えられる)、(ii) アウトラインのフローチャート(空欄を含むもの)を完成させる、(iii) 四角や楕円形のボックスを用いて本文のキーワード(キー概念)の関係を図解する(=マッピング)など、様々な形をとりうる。

・ **Picture-Sentence Matching** : 教師によって提示された絵を見て、文章中のどの文に対応しているかを考える。

・ **Paragraph-Summary Matching** : パラグラフのメイン・アイディアに関連するフレーズやパラグラフ内容を短くまとめた文を見て(教師が提示)、どのパラグラフに対応しているのかを考える。

・ **Summarizing** : 読み取った内容を簡潔に表現し直す(英語/日本語)。教師が準備した要約文の空欄埋め～生徒による要約文作成まで、活動自由度の適切なレベルを判断して実施する(徐々に自由度を高めていくことも可能である)。

・ **Story Retelling** : 読み取った内容を、キーワードや関連の絵を手がかり(cue)として英語で再生する。話してretell, 書いてretellが考えられる。

・ **Peer Questioning** : 文章内容について生徒同士で質問し合う。教師が質問リストA/質問リストBを作り、インフォメーション・ギャップ活動にしたり、習熟度が高くなれば、生徒が自分で質問を作ることも検討してよいかもしれない。

・ **Personalization Questions** : 「最も印象に残る文を1つ選ぶとすればどれですか、なぜですか」「文章を読んで興味深いと感じた事実を2つ書き出

してみよう」「日本と違うと思ったところはどこですか」「賛成するところは黄色のマーカーで、反対するところはピンクのマーカーで塗り分けてみよう」などの質問を提示して、読み取った英文内容について考えさせる、情報を吟味させる。

・**Creative Interpretation**：口語体の独白メッセージや会話については、読み取った内容を、翻訳家のように、あるいは自分が普段使っている日本語表現（方言、若者言葉）を用いて、意識してみる。

・**Oral Interpretation**：読み取った意味を効果的に口頭で表現し、発表する。この表現読み・朗読を行う準備過程で、筆者の意図や想い、メッセージの真の意味などを繰り返し吟味することになり、英文の理解が深まることも期待される。

・**Opinion Writing**：英文の内容について、意見を書く（自分の率直な思いを述べたり、あえて反論したり、与えられた立場から意見を述べたりする）。

これらの活動の内、特に後半のいくつかは、新学習指導要領でも強調されている「評価」「活用」にも関連するポスト・リーディング活動である。逆に、「評価・活用に適した文章とはどのようなものか」という視点から英文教材開発を行うことも考えてみたい。例えば、「意見表明活動 (e.g. opinion writing) を行うのに適した英文」とは、反論したくなるような内容が含まれている、文中に読者への問いかけの質問が入っている、そのモデル文の一部を置き換えれば自分なりのメッセージを作れるようになっている、などの特徴を持つ文章であろう。

(7)「テキストタイプに応じた読み」になっているかどうかを確認する。同一のテキストに対して、単に多様な活動を実施すれば良いという訳ではない。例えば、説明文・論説文と物語文では行うべき活動も違って来るはずである。さらに別例をあげれば、メール文は普通音読することはないし、番組表、ウェブページなどの情報検索読み (scanning) の対象となる文章は、最初から最後まで読み通すのではなく、必要な情報のみを読み取るのが普通である。授業活動の全てを実社会で行う活動 (real-world tasks) の模擬活動にすべきという意味ではないが、「そのタイプの文章に対して、そのような活動を行うのが自然・適切なのか」という点は考えてみたいところ

である。

4. リーディング指導を通じた思考力・感性の涵養

従来から言われているように、学校教育における英語科教育には、「技能習得 (skill acquisition)」と「人格陶冶 (personal enrichment)」の側面がある。英語力や英語リーディング能力を向上させることに加えて、生徒の思考力や感性を育てることにもつながる英語教育であることが理想である。このねらいを達成する上では、4技能の中で特にリーディングが果たす役割は大きく、指導にあたっては、まず読みの素材、“what to read”をよく吟味するようにしたい。「身近な」題材や読解スキル養成のための素材は、もちろん重要ではあるが、必ずしも生徒の深い思考を促す内容ではない場合がある。この点に関して、室井美稚子氏は、(ご自身の指導経験に基づいて)「TOEIC対策などで高度にプラクティカルなものを読ませることもあるのですが、そこには生徒の心に響いてくるような内容はありません。リーディング・スキルを伸ばすことは重要ですが、生徒の精神的な発達段階を考えると、無味乾燥なものを読むだけで勉強が終わってしまうのは寂しいと思います。」(Teaching English Now Vol.12, 2008)と述べている。実践的なテキストだけでなく、生徒の感性を刺激したり、深い思考を誘発したりするような内容を持った英文もやはり重要である。

優れた英文はそのメッセージ自体が持つ力が大きいのは確かであるが、その素材をどう料理するか(=指導法)を工夫することも考えたい。まず、教師自身が英文のメッセージ内容に思い入れを持ち、前述の Personalization Questions や Opinion Writingなども活用しながら、生徒がメッセージ内容を深いレベルで感じ取ったり、それについて考えたりする活動を構想・実践していかなければならない。

ただし、思考力・感性の涵養のためのリーディング活動といっても、日本語で行うことに終始するのはやはり問題であり(日英語比較を通してことばへの気づきを促すような活動は別として)、英語の習得と関連づける形で、少しでも良いから英語で意見を聞いたり、書いたり、話したりする活動を通して行うようにしたいところである。

読解指導にパズルを解く楽しさを

田中 武夫

(山梨大学)

1. パズルを解く感覚を作り出そう

読解の指導をする際に大切なことは、自分の力でテキストのメッセージを読み取る楽しさを感じさせることです。それは、パズルを解くときの感覚と同じです。いくつものピースを組み合わせて絵が完成するときのように、一文一文からテキスト全体のメッセージを読み取るときにも、部分の意味を推測したり全体像を発見したりする楽しみを味わう過程があります。テキストを頭から一文ずつ和訳し、文構造を解説していく指導は、パズルを解く前に答えを教えているようなものです。読解を上手に支援するためには、教師の発問を工夫し、自分の力で読み解く楽しさを感じさせる仕掛けを作る必要があります(田中・田中、2009を参照)。

では、読解指導において、教師はどのように発問していけばよいのでしょうか。本稿では、次の3つを考えてみます。(1) テキストのメッセージを読み解く楽しさをどのように感じさせるか、(2) テキスト理解にクラスの生徒をどのように参加させるか、(3) 読解のストラテジーをどのようにクラスで共有するか。ここでは、これらのポイントを考えながら、次のテキストをもとに発問を見ていきましょう。

< Text >

I'm studying sign language. Through this study, I learned signs. But I learned much more.

I learned that sign language is not about just signs. For example, my teacher taught me how to sign the word 'happy'. My hands were in the right place, but other students couldn't understand me well. My teacher said, "Smile when you sign 'happy'. Then people will understand you

better." From this, I learned that facial expressions and gestures are important for communication.

(平成18年度版New Crown 3 Lesson 8 Section 2)

このテキストは、久美が最近習い始めた手話について話している場面です。概要から始まり、具体的なエピソード、そして、学んだ教訓で構成されています。もっとも重要なメッセージは、手話は手の動きだけでなく表情なども大切であるということです。“Sign language is not about just signs.”の文は、理解につまずく生徒がいるものと予想され、指導のポイントの1つと考えられます。

2. メッセージを読み解く楽しさを感じさせる

まず、教材の特徴と生徒の実態をつかんだ上で、次の指導目標を設定したとします。「久美が学んだこと、体験したエピソード、学んだ教訓など、テキストに書かれた情報を正しく理解することができる。」最終ゴールを設定し、それを目指した指導を逆算し、どのような発問をどのような順序で行っていけばよいかを考えます。ここでは、テキストの理解に至る Pre-Reading, While-Reading での発問を考えます。

Pre-Reading の段階は、テキストを読む心理的な壁を低くしたり、テキストを読む動機を作り出したりする導入的な役割があります。そこで、次のような導入が考えられます。「先生が手話で何と表現しているか予想しましょう。3つ表現します。当ててみましょう。」と言って、まずはヒントなしで、教師が生徒の前で実際に手話をしてみせ予想させます。次に黒板に、ヒントとして、(1) I'm sorry. (2) Thank you. (3) I love you. と選択肢を板書し、

再度見せます。答え合わせの中で、なぜ分かったのか生徒とやりとりすることで、本文の主題を理解する伏線となります。Pre-Reading では、生徒の興味関心を高め、本文を読んでみたいと思わせる必要があります。そのため、本文内容に直接的・間接的につながる簡潔かつ本質的な導入の仕方を考えたいものです。

3. テキスト理解にクラス全員を参加させる

次に、While-Reading の段階に入っていきます。ここでは、1st / 2nd / 3rd Step の3つのステップで、異なる角度から何度も本文を読ませる発問提示を考えてみます。

< 1st Step >

- (1) 久美は今何を勉強していますか？
- (2) 教科書にある挿絵の久美の手話はどのような意味でしょうか？ 英語1語で本文から探そう。(教師が本文を声に出してゆっくりと読んでみる。)

1st Step の読みでは、テキストを一通りざっと読ませ、すべての生徒が答えることのできる問いを与えます。この例のように、テキストのトピックや概要をつかむためのキーワードや数字などを探させることが考えられます。これらの発問のあとに、「I learned much more.」とはどういう意味でしょう？、「much more」とは何を指しているのでしょうか？と問えば、この時点で答えを求めず軽く尋ねる程度であっても、次に続くテキストを読む動機が高まるはずで

す。2nd Step の読みでは、テキストに書かれている詳細な情報について読み取らせる問いを与えます。

< 2nd Step >

- (1) 久美に手話を教えてくれたのは誰？
- (2) 他の生徒は久美の手話を理解した。○か×か？
- (3) 先生は久美に何とアドバイスした？
- (4) 久美は何が重要だと学んだのか？(本文をもう一度通して読んでみる。)

ここでは、テキスト内容が大まかにつかめるような問いを与えます。答え合わせをしながら、テキストの意味を確認することができ、テキスト全てを和訳する必要がなくなります。この本文の新出語彙は、facial, expression, gesture, communication ですが、本文内で意味を推測できる語彙は、本文理解の際に推測させたり確認したりするとよいでしょう。

4. 読解ストラテジーをクラスで共有する

未知語の意味を推測したり、概要を読み取ったり、文構造や文章構成を考えてみたりと、読み手がテキストの意味を解釈するために使う手段は、読解ストラテジーと呼ばれます。読解ストラテジーは、今後新たなテキストを読むときに欠かせません。テキストの意味をどのように導き出せるか、教師がすぐに解説してしまうのではなく、生徒に発言させながらクラス全員で共有します。

例えば、2nd Step の発問 (2) の場合、答えが○か×かをまず全員に尋ね、テキストのどこで判断したかを尋ねます。「“My hands were in the right place” とはどういうこと？」、「but のあとには普通どんなことが続くかな？」と尋ねたり、「other students couldn't understand me well」の文で、「『他の生徒』を英語で何と言うかな？」、「other students のあとに何て書いてある？」、「couldn't とは何かな？」などと尋ねたりして、英語の得意な生徒も苦手な生徒も活躍させながら、文と文の関係や意味を確認していきます。大切なことは、教師がどのようなヒントをいつ提示するかをよく考え、部分的な意味理解からテキスト全体の理解をクラス全員で作りに上げることにあります。

3rd Step の読みでは、テキストのもっとも重要なメッセージを確認する発問が考えられます。

< 3rd Step >

- (1) “Sign language is not about just signs.” は日本語でどういう意味でしょう？
- (2) この文はどんなことを意味していると思う？(本文をもう一度通して読んでみる。)

この発問は、テキストの要点を尋ねています。つまり、テキスト全体の意味を理解しているかどうかを尋ねる問いです。応用的な発問のため、教師が「ここでは signs って何を指しているかな？」、「久美が手話をしているとき久美はどんな顔をしていたと思う？(怒った顔、無表情、笑顔の3つの絵を板書する。）」、「結局、何が大事なの？」などの補助的なヒントや発問を与え、生徒からの多様な意見をもとに、テキストの主題を理解させるとよいでしょう。
【参考文献】 田中武夫・田中知聡 (2009) 『英語教師のための発問テクニック：英語授業を活性化するリーディング指導』大修館書店。

読み深めから表現活動へ

高木 淳

(長野県長野市立西部中学校)

1. はじめに

2年生の2学期あたりになってくると、これまで学んだ知識をもとに、教科書の本文をさらに読み深めることが可能になってきます。NEW CROWNには、各学年に、LET'S READという形で新出文法のない読み物教材が位置づけられています。そこで、2年生のLET'S READ 2 “Zorba's Three Promises”を例に、読み深めから表現活動につながる指導方法について考えてみたいと思います。

2. 手順とゴールの提示

ここでは、グループで紙芝居風にアフレコを行うことを伝えます。本文は前半の2ページ、後半の2ページと分けて扱います。生徒の活動手順は以下の通りです。

- (1) 5～6人のグループで配役を決める。
- (2) ワークシート(図1)をもとに、LanguageとPerformanceの2つの観点にそって、大事に読みたい箇所を考える。

＜Language＞	
(1) 正確な発音で自信をもって読めるようにしたい単語	(2) 意味のまとまりを大事にしたい箇所
<input type="text"/>	<input type="text"/>
(3) 単語以上のつながりや韻律を大事にしたい箇所	
<input type="text"/>	
＜Performance＞ *場面や状況感を伝えるための読み方	
この箇所(原文)を	このように読みたい
<input type="text"/>	<input type="text"/>
<input type="text"/>	<input type="text"/>

図1 ワークシート(一部抜粋)

- (3) 記入したワークシートにそって、個人やグループで練習を行う。その後、グループで聞き合い、

アドバイスをし合う。

- (4) デジカメで撮ったピクチャー・カードをテレビの画面に映し、それをビデオカメラで撮影しながら、ビデオカメラのマイクの周囲で発表する(アフレコ)。グループごとに別室で行う。

発表の観点をLanguageとPerformanceの2観点とすることで、lay an eggやpromised your motherのような語と語の連結による音変化など、英語らしい発音、強勢、イントネーションや意味の区切りなどの音声について意識させると同時に、内容理解をともなった発表にすることができません。さらに、ワークシートに記入した事柄と発表がつながるように、ループリック(評価基準表)(右ページ, 図2)を作成し、自己評価をさせます。段階の「3」は全員がめざすべき到達目標です。

3. 心情理解のために

概要理解の読みで、感想を書かせたり、感動したところにアンダーラインを引かせたりしたあと、教師から以下のような質問で心情面の理解に揺さぶりをかけます。

- ・ ズルバはカモメが懇願する3つの約束のうち、2つには快く応じるが、3つ目の質問には“Me?”と聞き返しているがなぜなのか。
- ・ “So I must fly.”のセリフには、ラッキーのどのような気持ちが表れているのか。
- ・ 自分は猫だと思って育ってきたラッキーは、ズルバから告げられる言葉をどのように受け入れるのか。

以下は、教師からのこれらの質問をもとにPerformanceの観点で実際に生徒がワークシートに記入した内容の一部です。

- (1) Me? / 猫で飛び方を知らないこのおれが?

という驚き。

- (2) Yes, you. / あなたしかいないのです。お願いしますという感じ。
- (3) OK. I'll try. / 戸惑いながら。
- (4) Thank you. / 力尽きた感じと、三つの約束を受け入れてもらえた安堵感。
- (5) Rats and strange cats attacked her. / 怖さをだす感じで。
- (6) Lucky. Now it's time to fly. / 大きく「さあやるぞ」みたいに。
- (7) Why do I have to fly? Cats don't fly. / 何言っているのかわからないという感じで。
- (8) Me? A gull? / 驚きと疑いを込めて。
- (9) So I must fly. / 戸惑いながらもだんだん理解する感じで。
- (10) And I promised your mother. / 思い出しながら言っているように。
- (11) One rainy night Zorba and Lucky went to a tall tower. / 足がすくむくらい高いという感じで。
- (12) Lucky, all the sky is yours. / ラッキーが安心するように。
- (13) I love you too. / もう会えないのだな…と少し寂しげに。
- (14) Zorba said to the empty sky. / ゾルバの寂しさとうれしさが入りまじった感じが伝わるように。

中には、Now it's time to fly. の箇所を、「ラッキーが安心するように読みたい」や「わざと明るくしているように読みたい」と書いた生徒もいました。ゾルバにとって3つ目の約束を果たすことはラッキー

との別れをも意味するということまでを読み取って考えたでしょう。

4. どのように発表させるか

発表は、同じ内容のものを2回行うことを伝えておきます。これは、最終ゴールへ向けてのチャレンジが1回のみで終わりではなく、つまずきのもとに、再度、練習する段階をもうけるためで、他の言語活動を行う際にも大事にしていることです。実際、1回目の発表では、レコーディングという極度の緊張からセリフが飛んだり、セリフを口に出すことで精一杯だったりする生徒が多く、ルーブリックを用いた自己評価でも「2」が多くなります。1回目の発表の映像を見せて、他のグループのよさを共有させることで、2回目の発表での高まりが期待できます。上手に表現できた生徒に、どんな感じを伝えようとしたのかを語らせるのもよいと思います。

私が実践した学級では、発表後にグループ内でハイタッチをして、互いの成果をたたえ合う生徒たちの姿が印象的でした。

5. おわりに

“Thank you.”にしても“So I must fly.”にしても、文法の観点からは、生徒にとって既習の簡単な英文です。正確な発音や声量といった通常のLESSONで求められる力だけではなく、その言葉が発せられている場面や登場人物の心情を考えると、生徒は表現としての英語を身につけていくのだと考えています。単元終了時の感想では、「自分が役になりきることで、ストーリーの人物の気持ちまでわかったと思う」「このように本文を練習すると

楽しかったし、英文も内容も覚えやすかった」という記述が多く見られます。これまで学習してきた英語を、心情面とからめてじっくり味わい表現する。LET'S READのように新出文法のない読み物教材の単元だからこそできるチャンスだと考えています。

Zorba's Three Promises 発表用ルーブリック		2 nd Grade Class		No.:	Name :
観 点	1	2	3	4	
Language 英語の運用	①自信をもって読めない単語がある。 ②単語の発音がカタカナ読みであったり、単語同士の音のつながりや抑揚の表現ができないものが多い。	単語同士の音のつながりや文の抑揚に気をつけて表現できたところが2カ所以上ある。	単語同士の音のつながりや文の抑揚に気をつけて表現できたところが4カ所以上ある。	単語同士の音のつながりや文の抑揚に気をつけて表現できたところが5カ所以上ある。	
Performance 表現の仕方	自分のせりふをほとんど覚えておらず、ストーリーの場面・役柄やせりふに応じた感情を込めた発表になっていない。	みんなに聞こえる声で発表し、ストーリーの場面・役柄やせりふに応じて工夫した箇所が2カ所以上ある。	①適切な声量で発表し、ストーリーの場面・役柄やせりふに応じて工夫した箇所が3カ所以上ある。 ②自分のせりふだけではなく、全体の流れを考えながら、友のせりふにかかわらせて発表することができる。	完全に役になりきって発表し、ストーリーの場面・役柄やせりふに応じて工夫した箇所が4カ所以上ある（練習のとき以上の発表ができる）。	

図2 ルーブリック（一部抜粋）

コミュニケーションなリーディングのテスト

大森 博

(東京都練馬区立中村中学校)

1. はじめに

私たちは授業の中でリーディング活動を行います。その活動で身につけさせたい力とはどのような力なのでしょうか。リーディング活動ですので「読み取る力」がその中心になります。では、何を読み取る力なのか。主だったものを挙げると、

- ① 特定の情報を正確に読み取る力
- ② 文章全体の概要を読み取る力
- ③ 文脈を読み取る力

ではないでしょうか。

これらの力が身につけているのかを確認するにはどのようなテストが望ましいか、いくつかの例を挙げて考えてみましょう。

2. 実際に体験しそうな場面設定

私たちは既習の語彙や文法事項を踏まえ、テストの内容を考えます。しかし、授業で使用した文をリーディングの問題に使った場合、果たして本当に読み取る力を測ることができるのか疑問に思えます。問題文は生徒が授業で目にしたことのない文が望ましいでしょう。

また、実際の生活場面の中で学習した内容を用いることができるかどうかを測ることで学習の定着度をみるのが可能です。ですから、テスト問題では日常生活の中で実際に体験しそうなコミュニケーション場面を設定するのがよいでしょう。つまり、コミュニケーションなリーディングのテストが必要で

3. テスト作成前に決めておくこと

テストを作成する前に、そのテストのスペック(どのような構成にするかという設計図)を決めることが大切です。リーディング問題の場合、先に挙げた①②③などの力の中から、テストしたい力を決めます。

リーディング問題では語彙や文法、英作文との複合問題をよく見かけます。しかし、テスト後に生徒へフィードバックすることを考えると、問題ごとのテストポイントが1つにすることが望ましいでしょう。

テストポイントが決まったら、どのような場面や状況を設定するかを決めます。たとえば、手紙、ホームページ、伝言板、チラシ、スピーチ原稿、メニューなど、できるだけ日常生活で目にするものから選びます。

問題ごとの語数はあまり多くないほうがよいでしょう。生徒への負担を減らすためにも語数には気をつけたいものです。

4. リーディングテスト例

ここからは具体的な問題を挙げて考えましょう。

(ア) 概要を読み取る力を測るテスト

この問題は、文章の概要・要点をつかもうとする心理が自然に働く場面や、つかまなければならない場面を設定します。掲示板やポスター、案内、広告など、日常生活で目にするもので書かれている情報から概要・要点を自然に読み取っていくものが適しています。例を挙げてみましょう。

【例1】

あなたはアメリカに留学中です。町の情報誌を読んでいたら、次のような記事が目にとまりました。何について書かれた記事でしょうか、下から1つ選び、番号で答えなさい。

Big news!
Mao-Shin-Ci is coming to your town at last!
He is a world famous Chinese cook.
He has many fans in America.
He will stay in your town for a week.
You can eat his great Chinese food at the Plaza Hotel on the evening of October 9th and 10th. It is only \$35!

- ①中国旅行の案内 ②中華料理の特別ディナーの案内
③中国語講座の案内 ④中華料理の作り方教室の案内
(平成21年度東京都中英研「コミュニケーションテスト」より)

この問題は、アメリカ留学中に目にした町の情報誌という設定です。慣れない土地での生活では、その町の情報誌は様々な情報を知る上で欠かせないものではないでしょうか。留学する生徒はほとんどいませんが、留学という見知らぬ土地での生活をイメージし、興味を引きそうな場面を設定することで、自然と文全体を読み取ろうとする状況を作っています。

概要把握問題で注意することは、1つの単語や文から答えを導かないようにすることです。複数の語や文を総合して初めて答えがわかる仕組みが必要です。上の例では、Chinese cook という語から中国や中華料理というイメージがわきます。しかし You can eat ... の文を読み取らないと「ディナーの案内」という答えに辿り着きません。

また、答えの選択肢を作る場合は、問題の中に使われている語をもとに作るのがよいでしょう。一見どの選択肢も答えのように見えますが、最後まで読まなければ正答を選べないからです。選択肢の語数を同程度にするなど、答えを容易に選べない仕組みも必要です。

(イ) 文脈を読み取る力を測るテスト

この問題は、文章の流れを読み取る必要性のある場面を設定します。まとまった文の中に1文を入れなければならない場面や別々の英文を自然な流れになるように並べなおす必要がある場面などです。スピーチの原稿や日記、手紙など、書き手の意思や気持ちなどを反映したものが適しています。ここでは、1文を入れるタイプの例を挙げてみます。

【例2】

ケン は、夏休みにオーストラリアの中学生 Jack の家にホームステイしました。日本に戻ってから Jack にお礼の手紙を書いています。ほぼ書き終えたとき、どうしても次の1文を加えたくまりました。どこに加えるとよいか、最も適切な場所を選びなさい。

加える文：Those days made me happy.

Hi Jack,
Last Wednesday, I came to Japan. It was very hot here then.

① I remember the days with you in Australia. You were very kind to me. Do you remember the first day?

② I could not speak well. But your joke made me happy. Soon we were playing and talking a lot together.

③ I hope I will visit you in the future again. And I hope you will come to Japan and visit me, too. I will take you to many beautiful places here.

④ Please say hello to your family and write me back soon.

Your friend, Ken

(平成21年度東京都中英研「コミュニケーションテスト」より)

この問題は、ホームステイ先の Jack に対するお礼の手紙という設定です。ALT などお世話になった人へ英文でお礼を書くという活動は少なくありません。お礼を書く場面では、書いたあとにどうしても1文を加えたいという状況も起こりやすいのではないかと考えて、この場面を設定しています。

また、加える文にも加えるだけの価値が必要になります。Those days made me happy. という文にすることで相手への感謝のメッセージが込められるので、文を加える意味も十分にあります。入れる場所の前後にある文や段落のつながりも意図的に考える必要があります。文がこの場所にしか入れられない仕組みにするためにも熟慮が必要です。

5. おわりに

以上のように、リーディングテストをコミュニケーションタイプにするには、どのような場面を設定するのかというアイデアが必要不可欠です。普段から周囲に目を配り、題材になりそうなものを見つける努力を怠らないようにしたいものです。

【参考】 東京都中学校英語教育研究会「コミュニケーションテスト」。

「木」も「森」も見る教師

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

教科書編集に長年携わっていると、様々な質問を頂戴する。たとえば、tooの前にコンマが要るのかどうか、someoneの代名詞は何で受けるのか、あるいは英語の教科書なのになぜ中国人が出てくるのか、等々である。片や規範文法や記述文法の問題、片や英語教育観に関するものまで様々である。このようなことを振り返っているときに、「木を見て森を見ず」という言葉を思い起こした。教師や学習者の中には、木どころか枝や葉ばかりを見ている人はいないだろうか。あるいは森だけを見ていて、森を構成している木をないがしろにはしていないだろうか。

公教育に携わる英語教師は、木も森も見る必要があるのではないかと私は思っている。ここでは、木と森のメタファーを手がかりに、英語教育にかかわるいくつかの概念を対比させて議論してみたい。

1 広角レンズとズームレンズ

H. Douglas Brownは、*Strategies for Success* (Longman, 2002)という言語習得について書かれた書物の中で、カメラの交換レンズというメタファーを使って、言語を学ぶ際に、その言語を広角レンズで見るとズームレンズで見るとがあると述べている。子どもは特に広角レンズを使って言語全体を見る傾向があるのに対して、大人はズームレンズを使って言語の細部を見る傾向がある。また、大人の場合であっても、広角レンズを多用する人もいる。これは脳科学的に言えば、総合的な右脳による学習と分析的な左脳による学習ということになる。Brownによれば、言語学習にとってはどちらが良いということではなく、バランスをとることが大事である、という。私の喩えで言えば、木も森も見る必要がある、ということと同様である。

2 正確さと流暢さ

正確さ (accuracy) と流暢さ (fluency) の対立はどうだろうか。この点も英語教育では長い間議論されてきたことである。従来は単語や文構造の正確さが重要視され、会話などのことばのやりとりにおいて、流暢さが軽視されてこなかっただろうか。

日本人の学習者などについてよく言われることであるが、文法的に正しいことを言おうとするあまり、頭の中でいったんリハーサルをしてから口にする場合がある。これでは会話が途切れ途切れになり、気まずい雰囲気になってしまう。英語で日常会話をスムーズに行うためには、何を言うかよりも何かを言うことの方が大事である、とも言われる。もっとも、正確さを無視してことばを発するだけだと、その人の品性や教育のレベルを疑われる場合もあるので、注意が必要である。

3 質と量

上と似た概念であるが、質 (quality) と量 (quantity) の対立も重要である。これはライティングの指導を例に考えると分かりやすい。たとえば、将来の夢についてエッセイを書かせたとしよう。A君は5文で、B君は10文で書いた。文法的な観点では、A君の方が間違いが少なかった。その場合、どちらが良いエッセイだと言えるだろうか。質に重きを置いて採点したらA君、量に重きを置いて採点したら、B君の方が良い評価をもらえることになる。

また、エッセイの場合には、内容という観点も重要である。A君とB君のエッセイでは、どちらが自己表現ができていて、説得力があるか、といった観点である。このような、質と量の対立は、精読 (intensive reading) と多読 (extensive reading) の

ように、リーディング指導についても言える。

4 形式と機能

言語表現については、形式(form)と機能(function)という概念がある。この両項は対立とは言えないかもしれない。なぜなら、ある種の形式(文や発話)は、それが使用されるときに何らかの機能を持つからである。たとえば、Look at the bull. という文を見てみよう。これは命令文という形式を持っているが、この文を見ただけでは、牛がいるから気をつけろと警告しているのか、牛と一緒に写真を撮ろうと誘っているのか分からない。また命令文は命令をするためののみあるわけでもない。ふつう、命令をされるのはいやなものであるが、命令文を聞いて嬉しいこともある。たとえば、パーティで、Have these sandwiches. と言われた場合である。

新学習指導要領においては文法(文構造)が重視されているが、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえて」指導するようという説明がある。これは、文法の形式だけを教えるのではなく、その形式がコミュニケーションにおいて、どのような場面でのどのような目的のために使用されるのかを踏まえて指導してもらいたいということである。

5 正確さと適切さ

言語使用では、適切さ(appropriateness)という観点も重要である。今までは、基礎・基本の教育という観点で、正確さに重きが置かれていたが、これからの英語教育(コミュニケーションを重視する英語教育)においては、適切な言語使用をもっと重視していくべきではないだろうか。適切な言語使用とは、端的に言えば「正しい文を使っただけでは良好なコミュニケーションが成立するとは限らない」ということである。たとえば、見知らぬ人に道を尋ねるときに、Tell me the way to the station. でよいのか、Would you tell me the way to the station(, please)? と言うべきなのだろうか。いきなり Would you ...? の表現を教えるのが難しいとしたら、中学3年生くらいになってから教えてもよいだろう。関連して、英語での断り方を教

えるときに、Can you come to the party? に対する返答として、I'd like to, but I can't. I have another appointment. くらいの表現は礼儀として教えるべきだと思う。

6 文法シラバスと機能シラバス

1980年代にコミュニカティブ・アプローチが流布したおかげで、英語教育においても役に立つ英語やコミュニケーションのための英語が重視されるようになった。このアプローチは、言語シラバスの面でも、文法シラバス(grammaral syllabus)から機能シラバス(functional syllabus)への転換を招き、文法軽視の風潮、つまり「これからはコミュニケーションが重要なだから文法は二の次でよい」という誤った指導観を生むことにもなった。コミュニカティブ・アプローチは、台頭した初期の理論であっても、その理念をよく読むと、'fluency as well as accuracy' と謳^{うた}っている。つまり、コミュニケーションにおいて流暢さを重視しているが、文法の正確さを軽視しているわけではないのである。

7 習得と活用

最後に、本稿のまとめとして、新学習指導要領でキーワードになっている「習得」と「活用」について述べておきたい。「習得」とは、単語や文法のルール、発音の仕方などの主に言語材料に関する知識・技能、いわゆる基礎・基本の習得のことである。一方、「活用」とは、習得したものをできるだけオーセンティックな場で使ってみることである。たとえば、知識として得た文法を、読んだり話したりする活動の中で活用することである。そうすることによって、知識・技能がより一層定着することになる。

本稿は、木と森のメタファーを思い起こしたことを契機に、二項分類をしながら英語教育の課題について小論を述べた。大事なのはどちらかに偏ることなくバランスよく指導をすることである。このことが、自分の授業を振り返り、少しでも指導の幅を広げる契機になれば幸いである。

追記：教師には一人ひとりの生徒とクラス全体の両方を見る力量が求められる。



リーディング・テストの 常識・非常識

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

今回は、リーディング・テスト作成の常識について再考してみる。どのような常識も、一度は疑ってみる価値があるはずだ。

1. 英文は「既習」か「未習」か

まず、第1の常識は、「定期試験のリーディング・テストの英文は、教科書から出す」というものである。教師が問題意識を持っているかどうかは別として、ほとんどの場合、教科書から出ているのが現状である。

この問題の議論に当たり、テストの波及効果(教科書の英文をテストに出すことで、生徒に教科書を何度も読ませる効果)を期待して出すという点を別にすれば、既習の英文を出題し、その内容理解を問うというのは、多くの問題をはらんでいる。

まず、既習であるために、読まなくても内容を知っているわけであるから、正解できたとしても、出題された文章の内容理解が本当にできるかどうかはわからない。その意味では、定期試験のリーディング・テストは「出来レース」のようなものである。また、内容が既習であるために、教科書の英文は総合問題として出題されており、よく見ると内容を問う問題がほとんどないという皮肉な現象も起こっている。英文が出ていても、リーディング・テストにはなっていないのである。

こうした傾向の意味するところは、授業の目標は「その特定の英文を理解すること」になっているということである。しかし、本当にそれでいいのだろうか。本当にそれ「だけ」でいいのだろうか。

2. 「テキスト選び」と「問題作り」どちらが先か

第2の常識は、「リーディング・テストの作成では、

テキストを選んでから問題を作る」ということである。定期試験でリーディング・テストを作るときには、まずは英文を試験範囲から選択し、そこから何が問えるかを考え、質問を作っていくのではない。あるいは、試験範囲の中で、色々なことを問えそうな英文を探しだし、それから具体的な作問に入るということもあるかもしれない。いずれにしても、リーディング・テストは、テキスト探しから始まっている。

しかし、世界の様々なテスト開発機関においては、逆にテキストを決める前に問題がほぼ決まっているというのが、「常識」と言っていざらう。私がリーディング・テストの作り方に関してこのことに気がついたのは、日本の英語入試問題と海外の英語能力テストを分類していたときであった。海外の多くの英語能力テストでは、どの回のテストであってもほぼ同じような質問が繰り返されている。それに対して、日本の入試問題では必ずと言っていいほど、毎回異なった質問がなされている。よく言えば、日本のリーディング・テストは独創性に富む。しかし、別の見方をすれば、たまたま選んだテキストの特性により、問題作りが大きく左右される、「日替わり定食(こちらは、仕入れに左右される)」のようなテストで、リーディング力をどう捉えているか見えてこない。

言語テストの文献には、よく test specifications という用語が出てくる。これは、テストの設計図のようなもので、そのテストの作り方が詳細に書かれている。ここでは、リーディング・テキストについても、長さ、内容、言語的難易度やテキスト・タイプなどが規定されているが、同時に、測定するリーディング・スキルも規定されている。いくつかの具

体例を Heaton (1988: 106) から引用する。

- understand explicitly stated information
- understand relations between parts of a text through both lexical devices and connectives
- perceive temporal and spatial relationships, and also sequences of ideas
- understand conceptual meaning
- anticipate and predict what will come next in the text
- identify the main idea and other salient features in a text
- generalise and draw conclusions
- understand information not explicitly stated
- skim and scan (looking for the general meaning and reading for specific information)
- read critically
- adopt a flexible approach and vary reading strategies according to the type of material being read and the purpose for which it is being read

こうしたことが決まっているのであれば、問題を先に作ることもさほど難しいことではない。

この考え方に近い方法でリーディング・テストを作成しているのが、最近の東京都中学校英語教育研究会の「英語コミュニケーション・テスト」である。2009年のテストの特徴的な実例をいくつか見てみよう。文章の最後に適する文を選ばせたり、文を並べ換えさせたりする【文章構成理解問題】、指示代名詞が何を指すかを選ばせる【指示代名詞問題】、文章にふさわしいタイトルを選ばせる【タイトル選択問題】等の他に、【概要理解問題】や【詳細理解問題】などがある。これらは、テスト・デザインが変わらない限り、今後も出題されることになる。

3. 常識の裏側

では、なぜこのようなリーディングのテスト作りが、日本の学校では行われないのであろうか。その

原因は、おそらくリーディング指導の意識と関わっている。リーディングの指導において、教科書の英文の内容理解以外の目的が存在しないからではないか。教科書の中の英文は、文法などの学習事項を文章の中で提示するためのもので、リーディング・スキルを身につけるためのものではない。

実は、海外の中学校英語教科書と日本の中学校英語検定教科書を比較してみると、日本の教科書にはリーディング・タスクが極めて少なく、種類も限定的であることがわかる。このことは、日本では、伝統的にリーディング・テキストの内容理解に関する指導は、教師に任されてきたということをしている。しかし、その指導は往々にして、その場その場の文レベルの理解を中心とした指導であり、英語のリーディングに必要なスキルを包括的にカバーしたものではない。おそらく、スキルが教科書の中で明示的なタスクとして示され、スキル・シラバスのようなものが提示されていれば、教師もそれを意識するのだろうが、現実はそうっていない。

4. 結語

これらの問題は、結局のところ、リーディングの指導観の問題に行き着く。リーディングに関して、何を教えるのかという明確な目標がないのである。これが明確になっていれば、授業で扱った英文そのものの理解だけが最終目標とはならないはずだ。

どのような読みの力をつけたいかということが明確になれば、それが指導目標に反映され、指導自体も変わってくるであろう。この指導目標があれば、リーディング・テストの問題もそれを反映したものとなるはずだ。

もちろん、波及効果を考えれば、教科書の英文をそのまま出すということがあってもよいかもしれない。しかし、そうした問題ばかりでは、本来目指したリーディング・スキルを包括的に測ることは容易ではない。常識を一度疑ってみることで、授業もテストも、きっとこれまでとはまるで異なった景色になるだろう。

【参考文献】

Heaton, J.B. (1988) *Writing English Language Tests*. London: Longman.

本文の読解から 自己表現へ(3)



— 教科書本文を利用した自己表現活動の工夫 —

立川 研一 Tatsukawa Kenichi (大分県九重町立野上中学校)

① 計画的自己表現活動

本稿では教科書本文を利用した英作文のさせ方や発展的な自己表現活動についての実践例を述べる。

私は学期や単元の節目に生徒に取り組ませる大きな自己表現活動を以下のように考え、それぞれの活動が可能になるように、毎回の授業の中で小さな自己表現活動を仕組んでいる。(以下の課題は例であって、固定的なものではない。教科書の内容や生徒の状況などに応じて適宜変えている。)

- 【1年生】 「自己紹介・他者紹介」
「私の一日」
「クリスマスカードを書こう」
「4行詩」
- 【2年生】 「日記を書こう」
「動物園の動物は幸せか？」
「行きたい場所とその理由」
「修学旅行の思い出」
「More than 5行詩」
- 【3年生】 「日本の文化を説明しよう」
「究極の選択」
「My Opinion」(環境や平和など)
「Show & Tell」
「卒業の詩」

例えば2年生の「行きたい場所とその理由」という自己表現活動は、教科書で「未来表現」「There is/areの文」「不定詞」の学習を終えたあとに行う。そこで、毎回の授業の中では「行きたい場所(want to)」「そこにあるもの(There is/are)」「そこに行ったらしたいこと(不定詞副詞的用法)」「そのときの自分の感想(will be + 感想・感情)」などを、基本本文や本文を利用しながら段階的に作らせていくのである。

最終的に生徒が書き上げた文は以下のようなものである。組み合わせれば長い作文であるが、個々の文は毎回の授業の中で練習してきたものばかりであ

る。教科書で学んだ Second, Finally などの表現をうまく利用していることもわかる。

【生徒の作文例】

○ I want to go to Tokyo to do many things. There are a lot of refuse. It is dirty. Because there are many high-rise buildings. I think that we must clean Tokyo. Second, there are many TV stations. My favorite Tokyo TV station is Fuji TV. It is big. If I go there, I will meet famous persons. Third, I want to go to an aquarium in Sunshine City. It is large. And I want to go to Ueno Zoo. There are many animals to touch. Finally, I want to go to Tokyo Disney Land. There are many rides. It will be fun.

また、この活動の前には、本誌 Vol.14 での拙稿「『活用(output)』力を高める英語の授業」で紹介した自己表現活動、「動物園の動物は幸せか？」を行っており、そこで用いた「If 現在形, 未来表現」の文型も散見された。

② 個々の授業での自己表現活動

単元や学期の節目に設定する大きな自己表現活動に向けて、個々の授業ではどのような工夫を行っているか、以下に紹介する。

(1) 文の一部を書き換える

私は基本的には教科書の本文や基本本文を利用し、生徒自身に関わる表現に書き換えさせることが多い。基本本文に限らず、「これは後の自己表現に使えるそうだ」と思われる表現があればすぐに利用する。会話の一部を取り出して、自分たちの身近な話題に書き換えさせることもある。

例えば、平成18年度版 NEW CROWN BOOK 1

p.69 には以下のような表現がある。

Many people in my town speak Spanish.
It's useful.

答え

- (1) dog (2) mouse (3) raven[crow] (4) bee
(5) bird (6) owl

この文の下線部分を自分たちの町に合わせて書き換えさせるのである。班ごとに意見を出し合わせると、生徒たちは様々な文を作る。

・ Many people in my town speak Oita-ben.
It's useful.

といった単純なものから、

・ Many old people in my town like *tsukemono*. It's smelly.

など、工夫を凝らしたものも見られた。さらに生徒の興味に合わせて、town を school や class に変えたり、people を teachers や students に変えたりすることで、

・ Many teachers in my school come to school by car.

・ Many students in my school come to school by train.

など、学校紹介の表現へと広がっていった。

(2)「オリジナル比喩」を創作する

教科書の一部を使った作文の例として、「創作比喩文」の活動を紹介する。平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 2* p.68 は、“This room is as cold as a fridge.” という文で始まっている。

“as 形容詞 as ~” は、“like (a) ~” と並んで英語でよく用いられる直喩の表現の 1 つである。その中には “as white as snow” や “as cold as ice” のようにわかりやすいものもあれば、“as cute as a button” などのように日本人には理解しにくいものもある。

まずは以下の () 内にどんな動物が入るかを予想させ、答え合わせをする。

英語の比喩表現

- (1) as sick as a () :「とても体調が悪い」
(2) as quiet as a () :「とても静かな」
(3) as black as a () :「真っ黒な」
(4) as busy as a () :「とても忙しい」
(5) as free as a () :「とても自由な」
(6) as wise as an () :「とても賢い」

「えー？」という意外な反応から、「へえ」という納得のものまで様々である。他にもたくさんあるが、ここでは後の自由な自己表現につなげるため、あえて多くは扱わない。

次に、“○○ is as △△ as (a) □□.” という形になるような自分たち独自の比喩の文を、班ごとに協力して作らせる。例として私がいつも挙げるのは以下の文であるが、たいていはブーイングとなる。

Ken is as handsome as Johnny Depp.

2 番目の as の後ろは動物でも食べ物でも、何でもよいことにする。また、納豆などの日本語を用いることもよしとする。できあがった文は、ALT が来校したときに acceptable かどうか判定してもらった。

【生徒の作品例】

- My spirit is as sticky as *natto*.
Mr. X is as noisy as a typhoon.
My mother is as kind as a marshmallow.
Math is as difficult as a puzzle.
Our class is as noisy as a zoo.

(3) 会話の一部を固定する

平成 18 年度版 *NEW CROWN BOOK 2* p.13 には次のような会話がある。

Paul: I studied *shodo* for an hour and a half.
Kumi: That's a long time. Were you tired?

ここでは、二重下線部を残させ、「相手が『それは長いね!』と言うような Paul の台詞を作りなさい」という指示を行った。またそれに合わせて久美の台詞の後半部分(波線部)も適切に変えさせた。

生徒は自分たち自身の生活の中から、自然に一般動詞の過去形を使った文を作らねばならず、またそれに応じる be 動詞の過去の疑問文も作らねばならない。ペアや班でアイデアを出し合うことで、楽しく文型練習に取り組むとともに、この lesson での主眼である過去形の文を自然に練習することができた。

【生徒の作文例】

- A: I played a computer game for three hours.
B: That's a long time. Were you happy?
○A: I talked with Mr. Tatsukawa for 15 minutes.
B: That's a long time! Were you tired?

なお、最後の文は“Were you ~?”だけではなく、形容詞によっては“Was it ~?”を使わなければならないものもある。この学習は後の「(休日の)日記を書こう」という活動に向けてのよい練習となった。

3. 「卒業の詩」作り

3年生を担当したときは、卒業前に関西大学教授の田尻悟郎氏の実践を参考にした授業を行う。以下の写真は、『ブルーデイブック』(Bradley Trevor Greive, 竹書房)の中に収められた1枚である。



この写真をじっと見つめさせ、「この2頭のクマは何を語っているのかな? どんな場面だろう?」と、日本語で想像させる。ほとんどの答えは「別れのシーン」、「励ましている」などである。そこで、「クマ同士が語り合っている言葉を日本語で書いてみよう」と問いかけた。

書けたところで「班で協力して、それを『心が伝わる英文』で表現してみよう」と指示した。その際に、「『想い』を伝えるためには、多くの文を使うこともある」ので、1つの文が長くなってもよいことを告げた。こうして知恵を出し合い、ALTのアドバイスを受けながら、各自の文をつなげていったものが次の作品である。

【班ごとの作品例】

- Well-done, you tried your best.
Are you scared? Don't worry.
Now I'm here with you.
Remember my words whenever and wherever you are.
○ Don't worry about anything.
We'll be friends forever.
Good luck!
I never forget you.
We are sure to see each other again.
○ You were afraid, weren't you?
You were sad, weren't you?
I am sorry I couldn't understand you.
I have loved you for a long time.
It's hard for me to say goodbye.
But you are not alone.
I will always with you in your heart.
○ You can do it. So take it easy.
When you feel lonely, you can come back here anytime.
I always wait for you.
So we support each other in our hearts.

卒業や受験を控えた生徒たちは、互いを思いやり、励まし合う心からか、皆真剣に取り組んでいた。作品には、3年間で学んだ様々な表現がちりばめられていた。

この活動は、「言葉は心を運ぶもの」という思いをもって卒業後も英語学習に取り組んでほしいという願いから取り組んだ活動である。なお、この実践は構成的グループエンカウンター (SGE) 的手法を取り入れた英語授業の例として、『大分大学教育福祉科学部附属中学校研究紀要第53集』に詳しく述べている。



【引用文献】

- Bradley Trevor Greive (2000)
『The Blue Day Book ブルーデイブック』竹書房。

Just Now

I はじめに

座間市立入谷小学校は、神奈川県中央部にあり、座間市の中でも西部に面する小学校です。校舎の西側には田んぼが広がり、その先には相模川左岸用水路が流れ、周りに多種の植物が生い茂っています。

平成21年度、それまで「総合的な学習の時間」等について研究をしていた本校の職員は、県及び市の研究委託を受け、『進んで聞こう、話そう、わかり合おうとする子をめざして～コミュニケーション能力の素地を養う英語活動の工夫～』をテーマに「外国語活動」の研究をスタートさせました。

また、座間市では、昨年度「外国語活動基本計画」が策定され、新学習指導要領の移行期を受けて、市内の多くの学校で平成21年度には年間15時間、平成22年度には年間25時間の「外国語活動」の時間を設け、どの学校も年間35時間の完全実施に向けて準備を進めることになりました。

しかし、「コミュニケーションの素地って何?」「はてさて、担任主体の外国語活動の授業って、どんな感じで進めればいいの?」これからの研究に向けて、課題は山積み。研究会を開いても、先が見えない論議が続きました。



II 研究のスタートだからいい!

研究の始まりは、これからの「外国語活動」を円滑に実施していくためには、新学習指導要領に示さ

職員全員でとり組んだ 授業実践と教材開発

— 校内研究会 ゼロからのスタート、そして今 —

前田 善仁 Maeda Yoshihito
香川 麻理 Kagawa Mari
(神奈川県座間市立入谷小学校)

れた目標を理解することになりました。そこで、『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』を作られた、前文部科学省教科調査官であり、現在、大阪樟蔭女子大学教授の菅正隆先生を招聘し、「小学校外国語活動について」というテーマで本校の職員及び市内の先生方を対象に講演していただきました。

さすがに、菅先生のお話はわかりやすく、先の見えない本校の職員の気持ちを一気に変化させたのでした。先生から、「入谷小学校は研究をスタートしたばかり。だからいい。わくわく感の残っている高学年に、楽しく(interesting)、心を育てる指導をしてほしい」とのご助言を受け、カリスマ教授から魔法をかけられた私たちは、実に良いスタートを切ることができました。

III さあ、子どもと一緒に楽しもう!

菅先生の話を受け、校内研究会の方向性が見え出した先生方の動きが変わり始めました。まずは、高学年で実施されている「外国語活動」を、職員全員で見ることから始めました。その動きはやがて大きな成果となって表れ始めます。

(1) 授業実践部

高学年の先生方は、「外国語活動」の時間を全ての教職員および市内の他校の希望する教員に授業公開をしました。そして驚くことに、公開授業を参観した1～4学年の教員は、2学期になるとTT(チームティーチング)として学級担任と一緒に授業に参加することにし、3学期には全職員が主担当として子どもたちと授業を行いました。みんなで指導案を作り、みんなで『英語ノート』(文部科学省、2009)を使いながら、高学年の子どもたちと一緒に楽しく授業を進めたのです。

(2) 教材研究部

本校では、『英語ノート』を基本に授業を進めています。授業を進める中で、座間市の郷土の良さを感じさせたいという教師の願いから、児童の興味を引く教材が次々と作られていきました。

『英語ノート2』《Lesson 5 道案内をしよう》の単元では、教室を小さな町にレイアウトし、グループで目的地まで道案内をするといった活動を行います。そこで教材研究部を中心に、入谷小学校近辺の駅・店等を撮影しに行き教材を作成しました。子どもたちは、日頃から目にする店の写真などを見ながら道案内ができるので大喜びでした。

児童にとって身近な教材・教具を使うことで、笑顔あふれる「外国語活動」の授業が進められています。こうした教材等は次年度も活用できるようにラミネーター等で加工する工夫をしました。

本校には、「ワールドルーム」という教室が設置されていますが、この1年間で開発した教材・教具が整備されており、単元ごとに活用できるような工夫がなされています。



IV 児童の変容

本校では、研究を進めるにあたり、平成21年2月から児童の意識調査を実施しています。

現在6年生の児童が5年生の時からとっているアンケートの項目は11項目ですが、その中から注目すべき2点について述べたいと思います。

(1) 「英語の授業が好きですか？」との質問に対して、平成21年2月には、47%の児童が「好き」「どちらかといえば好き」と回答していました。平成22年2月に同じ質問をしたところ、86%の児童が「好き」「どちらかといえば好き」と回答しています。

(2) 「もし、あなたに外国人が英語で話しかけてきたらどうしますか？」との質問に対しては、平成21年2月には、「英語で受け答えをする」と回答した児童が5.8%でしたが、平成22年2月に同じ質問をしたところ、32.6%の児童が「英語で受け答えをする」と答えています。またさらに、日本語も使いながら、外国人と何らかの形で関わりを持つと答えた児童が平成21年2月には61.8%でしたが、平成22年2月には92.8%に増加しています。

表 1

質問 (%) 現6学年対象	もし、あなたに外国人が英語で話しかけてきたらどうしますか？		
	H21.2	H21.6	H22.2
英語で受け答えをする	5.8	26.7	32.6
日本語で答える	56	66.3	60.2
だまっている	27.5	1.2	3.6
その場からにげる	10.7	5.8	3.6

「外国語活動」のねらいは、コミュニケーションの素地を養うことにあります。昨今、子どもたち同士の間関わりが減少している中、英語だからこそ友達同士で関わるができる、クラスの仲間の情報を共有できる等、今後も『英語ノート』を活用しながら児童の実態に合った「外国語活動」を行っていきたいと考えています。

V おわりに

本校の水曜日の朝は、「英語でのひとことレッスン」から始まります。先生方は皆笑顔で、「外国語活動」で使える英語の表現を学んでいるのです。校長先生は朝会で、「あいさつ」の大切さを児童に話し、ある時は教頭先生が前に立ち、「目と目であいさつをすることの大切さ」を伝え、全校児童全員で、“Good morning!”と言い合う等、全校が一体となってめざす子ども像に向かって研究を進めています。研究のスタートに種を蒔いてくださった菅正隆先生のご助言をもとに、今後も“楽しく”“笑顔で”研究を進めていきたいと思っています。

The Perfect *Omiyage* (Part 1)

Don Maybin

(Shonan Institute of Technology)

Japanese going overseas are famous for giving presents, but what makes the best *omiyage*, or souvenir from Japan? After living in this country for many years, I have developed my own ideas, which I would like to share with you. But first let's discuss what qualities an ideal gift should not have.

When I first came to Japan, I lived in Okayama prefecture and soon developed a taste for the local pottery, *bizen-yaki*. At first, I thought it looked primitive. There were no pretty designs or glazes and the surface was rough. But I came to enjoy its simplicity and the beauty of the warm brown earth shades. Was I developing a sense of *wabi-sabi*? I didn't know, but I really liked *bizen-yaki*.

For my first trip back to Canada, I saved and bought *bizen-yaki* to give family and friends, carefully selecting each wonderful piece of pottery. But my excitement turned into a headache when I started packing. The pieces were heavy and breakable. I had to wrap each one carefully with bubble wrap and sheets of newspaper so they took up too much space in my suitcase. There was no room for my clothes! But my problems had only just started.

I thought that everyone would love the heavy gifts that I had hauled from Japan. My mother likes roses so I gave her a beautiful vase with a long, thin neck perfect for a single rose. She opened the package slowly until she reached the treasure inside, looked a little puzzled then said, "Did your students make this?" I looked around her living room filled with nick-knacks: ornate Italian angels on the walls, dolls dressed in outfits from around the world, a Herend tea set with a leafy pattern on the table. Whatever made me think she would like her little vase?!

Unfortunately, each person that I gave my tasteful pottery to had a similar reaction and I soon realized what a poor choice my present from Japan was. Heavy, breakable, expensive — all the things a great *omiyage* should not be. Worst of all, most people thought my *bizen-yaki* could be from anywhere.

So what makes the perfect gift from Japan? Many of my friends take *furoshiki*, or wrapping cloths, to give people abroad. This seems like an excellent idea. A *furoshiki* is light and fits nicely into your suitcase. It cannot be broken like pottery. The designs are beautiful, especially the more colorful or traditional patterns. But there is one pitfall: the cost.

Furoshiki have a wide price range and some made of silk are very expensive. Japanese recognize the quality; however, this is not true for many foreigners. When they receive a *furoshiki*, North Americans do not use it to wrap things. I have seen *furoshiki* serve as scarves, table centers or made into sofa cushions. The *furoshiki* is appreciated, but it soon becomes dirty and needs to be cleaned... by tossing it into a washing machine! If you plan to give a *furoshiki* as a gift, definitely do not give one made of silk or a high quality material, such as Kaga-yuzen. An attractive cloth made of 100% polyester will be appreciated just as much, maybe even more so since it can survive laundry day.

The best presents should be light, unbreakable and inexpensive. They should give you a "feel" of the local culture which anyone can easily understand. Sometimes the best gifts are right under your nose. What we think of as ordinary, friends overseas may find exotic and very, very special. Next time, I will tell you about my most successful — and easy to prepare — gifts from Japan.

アウトプット活動にも 使えるウェブサイトを 積極的に利用しよう

近年、英語教育において Information and Communication Technology (ICT) の活用が盛んに行われている。特に小学校英語活動においては、平成 21 年 4 月に文部科学省から全国の小学校に『英語ノート』デジタル版が配布され、各地でこの教材を利用した効果的な指導に関する研究や ICT を利用した補助教材の開発が進められている（例：和歌山県教育センター学びの丘平成 20・21 年度指定研究、http://www.wakayama-edc.big-u.jp/kenkyukiyo20/kenkyukiyo_top.htm（平成 20 年度報告のみ参照可））。

そこで本稿では、ICT を利用した小学校英語活動を体験した児童が中学校に入学することを踏まえ、中学校英語授業における ICT 利用促進に有効なウェブサイトを紹介する。ウェブサイトの利用と言えば、インプット活動を想定する場合が多いと想像されるが、今回はアウトプット活動にも活用できるウェブサイトを 3 つ取り上げる。なお、ウェブサイトを紹介するにあたり、授業は PC (CALL) 教室で実施、活動形態はグループ、生徒に与えるタスクは「クラス内発表として、レッスンに出てきたシドニー、ハーバーブリッジの実況中継を行う」と仮定する。

1. EarthCam (<http://www.earthcam.com/>)

[特徴] 世界主要都市の映像をリアルタイムで閲覧することができる。ただ、時差の関係から、アジアやオセアニアといった比較的時差の小さい地域に限定されるという欠点がある。

[授業での使用例] ハーバーブリッジの映像を実況中継させる。実況中継の前に、どのように実況中継するのか、そのポイントを日本語で討論させる。

— こうすればあなたの授業は もっと生徒を魅きつける —

石川保茂 Ishikawa Yasushige
(京都外国語大学・同短期大学)

2. BYU-BNC (<http://corpus.byu.edu/bnc/>)

[特徴] British National Corpus (BNC) を無料で使用することができる。

[使用手順] 登録後、画面左側の DISPLAY で KWIC を選択し、ボックスに検索したい語(句)等を入力し検索させると、コロケーションを調査することができる(調査方法は INTRODUCTION にある search for surrounding words をクリックすれば参照可)。

[授業での使用例] 教師が、実況中継に有効なコロケーションを意識した語彙リストを作成する際に利用する。また、生徒にコロケーション(1つの単語が他のどういう単語とつながるか)調査を体験させることにより、コロケーションを実感させる。

3. Acapela Text to Speech Demo

(<http://www.acapela-group.com/text-to-speech-interactive-demo.html>)

[特徴] 入力したテキストが合成音声に生成される。音声はイギリス英語・アメリカ英語の2種類が用意されている。なお、音声ファイルを自動的に生成するウェブサイトもある(Loquendo Interactive TTS Demo, <http://tts.loquendo.com/ttsdemo/default.asp?page=id&language=en>)。

[授業での使用例] 発音やプロソディーを確認させながら音読練習をさせ、クラス内発表に備える。

以上、インプット活動だけではなく、アウトプット活動にも利用可能なウェブサイトを紹介した。今後、中学校英語教育において、ICT 活用による授業実践がますます行われることを期待して止まない。

注：URL 参照日はいずれも 2010 年 3 月 8 日である。

英語教育の明日をつくる ILEC セミナーのお知らせ

2010 夏季英語教育セミナー

日 時：2010年8月4日(水) 9:30～16:20
 会 場：中野サンプラザ URL <http://www.sunplaza.jp/>
 (東京都中野区：JR 中央線・総武線／東京メトロ東西線「中野」駅北口より徒歩1分)
 主 催：NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所
 協 賛：株式会社 三省堂
 対 象：中学校英語教師，中学校英語に関心をお持ちの方
 定 員：120名
 参加費：4,000円
 内 容：《講演・ワークショップ》

- I 「4技能を統合した教室活動が目指すのは」
 金子 朝子(かねこ ともこ) [昭和女子大学]
- II 「自己表現力を高める
 一定着を図るための『繰り返し』の指導の工夫」
 日基 滋之(ひだい しげゆき) [玉川大学]
- III 「楽しく『教科書を読む』—新学習指導要領をふまえて」
 小寺 令子(こでら れいこ) [東京都文京区立第十中学校]
- IV 「英語教育，これからの10年」
 齋藤 栄二(さいとう えいじ) [京大外国語大学]



※参加される方全員に同じプログラムを受講していただきます。
 ※タイトル・内容は一部変更することもございます。予めご了承ください。

●昨年度セミナーの参加者の感想●

- ・ 今まで辞書指導をいかにおろそかにしていたか反省させられました。2学期以降，5分間の辞書指導をやってみたいと思います。
- ・ 小学校でどのように英語を学んでくるのか，また，中学校の入門期でやっていることとの指導法の違いがよくわかりました。
- ・ 実際に自分が活動することで，「わからない」ということを実感できました。また，少しずつヒントを与えることで，こんなにも違いがあるとおどろきました。
- ・ 社会から世界へ通用する日本人を育てる，定期テストのための学習ではなく，20～30年後も心に残る英語授業を作っていこうと決意をあらたにできた。

セミナーのお申し込み・お問い合わせ：

NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL 03-3230-9473

URL <http://www.ilec.jp/>

※セミナーの詳細はホームページで順次ご案内する予定です。

TEACHING
ENGLISH
NOW

18号

2010年
5月7日発行
定価80円
(本体76円)

編集・発行人：八幡統厚
 発行所：株式会社三省堂
 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14
 電話 (03)3230-9422(編集)
 振替 東京 00160-5-54300
 [NEW CROWN ホームページ]
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>
 印刷：三省堂印刷株式会社
 〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9
 電話 (042)645-6111(代)

編集後記

三省堂は，Web「三省堂英語教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>)にて，今後も，授業をサポートする資料(年間指導計画表，ワークシートなど)や英語教育に関する情報(コラム，研究会情報など)を掲載していきます。

対話流 未来を生み出すコミュニケーション

清宮普美代・北川達夫 [著]

1,575 円 (税込) 四六判 224 ページ ISBN 978-4-385-36437-7

「闘うコミュニケーション」はもう古い。「学び合う集団」の創造に不可欠なのは、同調でも対立でもない“対話”の発想。学校と企業において学習環境の再設計を提唱、実践する 2 人のプロが織りなす、変革と多様化の時代の対話論。2009 年 7 月刊。



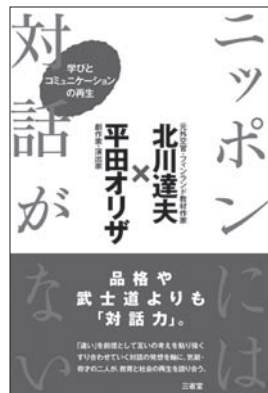
ニッポンには対話がない

学びとコミュニケーションの再生

北川達夫・平田オリザ [著]

1,575 円 (税込) 四六判 216 ページ ISBN 978-4-385-36371-4

品格や武士道精神よりも、いま日本社会に必要なのは「対話力」。「違い」を前提として互いの考えをすり合わせていく対話型コミュニケーションを、地域社会や学校教育の場に組み込んでいく。各方面から高い評価を得た教育と社会の再生論。2008 年 4 月刊。



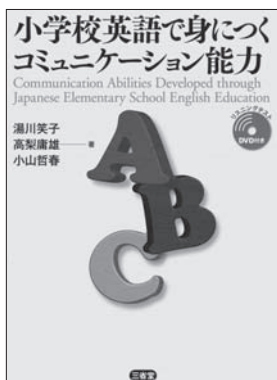
教授のおいしい英会話

— アメリカ編 —

霜崎實・ジョージ・ドウ [共著]

1,890 円 (税込) 四六変型判 192 ページ ISBN 978-4-385-36413-1

NHK ラジオ講座「英会話入門」の 3 ヶ月間のコースを速習 2 週間！で学べるようにコンパクトにまとめた英会話独習書。付属の CD を使った反復練習で、英語表現のコツと英語のリズムを体得。音声 CD2 枚付き。



小学校英語で身につくコミュニケーション能力

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春 [著]

2,625 円 (税込) A5 判 212 ページ ISBN 978-4-385-36401-8

小学校英語で児童が身につけた「コミュニケーション能力」とは？ 外国語活動が必修化された今、児童・教師を対象にした調査を通してこれまでの成果を検証し、今後の展開の可能性を探る。リスニングテスト DVD 付き。

聞く活動重視の新しいテキスト

小学校外国語活動用

KIDS CROWN

KIDS CROWN 編集委員会 [渡邊時夫(代表) 久埜百合ほか] 編

楽しく英語に親しむ／確かな力をつける／安心して指導できる

準拠教材

KIDS CROWN 英語絵カード



(スタンダードコース/アドバンスコース)
トランプサイズカード (タテ 90mm×ヨコ 62mm)
各 160 枚
定価 各 1,200 円 (本体 1,143 円+税)

プライマリーコース



■指導用セット
ーセット内容ー
ビデオ (VHS 1本)
ウォールチャート
(B 全判 10 枚)
CD (1 枚)
教師用指導書
(B 判 112 頁)

低学年用

定価 18,900 円
(本体 18,000 円+税)

スタンダードコース



はじめて使う
テキスト

■テキスト
B5 判 72 頁
定価 500 円
(本体 476 円+税)
■教師用指導書
B5 判 112 頁
CD (3 枚)
ウォールチャート
(B 全判 10 チャート)
定価 7,000 円
(本体 6,667 円+税)

アドバンスコース



スタンダードに
続くテキスト

■テキスト
B5 判 80 頁
定価 550 円
(本体 524 円+税)
■教師用指導書
B5 判 136 頁
CD (4 枚)
ウォールチャート
(B 全判 14 チャート)
定価 8,000 円
(本体 7,619 円+税)

親子で 英会話絵じてん① CD付き

らくらくひとこと編

三省堂編修所 [編] A. G. ウェインライト [監修]

AB 判 64 頁 定価 1,995 円 (本体 1,900 円+税)

ポップなイラスト、簡単なカナ発音、日本語の発想から知りたい表現にアクセスできる構成で、子どもと楽しく英語に触れられる絵本。「お礼をいう」「ほめる」など、言葉の「はたらき」ごとに基本英会話表現を整理。小学校中学年以上向き。オールカラー。



親子で 英会話絵じてん② CD付き

ふだんの場面編

三省堂編修所 [編] A. G. ウェインライト [監修]

AB 判 64 頁 定価 1,995 円 (本体 1,900 円+税)

第1巻同様、いきいきとした英会話表現に触れられる絵本。欧米以外に、アフリカやアジアなどの世界中の子どもたちが登場。第2巻では「授業中」「お買い物」など、子どもたちの日常の「場面」ごとに基本英会話表現を整理。小学校中学年以上向き。オールカラー。



三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本社 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

□大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177

□名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212

□九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532

□札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F TEL. 011 (616) 8722